

うし、貴重な体験をされたと感じました。

糸井さんは現在、当協会の理事です。

(愛知県 森藤 眞一郎)

## 生涯

三重県 中森 譲

### 波瀾万丈の私の生涯

大正十四（一九二五）年九月三日、父、警察官のため名古屋笹島署で生まれる。三歳まで名古屋居住。

家は一志郡大三村二本木（浜城）。大三村とは、大村（二本木）、岡、三ヶ野が合併して、大三村と名称する。

昭和六（一九三一）年四月一日、大三村尋常高等小学校入学。当時は戦争の多い時代で、世界中がごたごたしていた。軍隊と軍需工場に力を入れて一般国民は本当に貧しい生活だった。農家にあ

りながら食糧は麦八分入りのご飯、野菜ご飯、いも飯。肉なんかは全然食べられない。刺身なんかは正月位しか食べられなかった。魚は川で釣りして食べるし、肉は買っては食べられないが、父が狩りをしていたので、山兔、山鳥は時々食べたぐらい。

当時は、冬は寒く零下一〇度以下の日はいつもあり、雪も多く降り積もって通学も大変だった。学生服の上に綿入れのハンコを作ってもらい着て通学するが、汚い話ではあるが、青鼻が出るわ出るわ、ハンコの袖で拭くので誰の袖を見てもカバカバ。鼻をかむ紙さえなく、新聞紙をもんで柔らかくして拭くと新聞紙のインクで顔は真っ黒、今思い出せば面白いが、そんな時代であった。腕白坊主の方で、友達もそんなばかり多くいた。余り勉強は好きでなかったがママママの所かな……。当時は誰も余り勉強はしなかった。それより農家の者は田畑の手伝いの方が忙しかった。私は学校から帰ると勉強どころか、農繁期、養蚕期とも

なれば大忙し、田畑の耕作が多いため田植え時ともなれば準備に。当時は農機具は一切なく、田を耕すのに牛を使って耕す。そのために牛の鼻を持って田を耕すが、私は鼻持ち、後ろから父がカラスキで耕すが、牛が少しでも横に動くと、山と山の谷間の田んぼのため、父に大きな声で叱られると谷じゅう聞こえる。よく叱られた、でもよく手伝った。父に大きな声で叱られる度に、母は近くへ来てよく慰めてくれた。本当に優しい母でした。

養蚕期ともなれば、実家（浜城）の家の周囲は大部分が家の土地だったので畑で桑摘みもして、蚕も年三、四回して家の収入に協力した。

私の知る限りでも相当の畑、田、山があったが、父は百姓が好きでないため田畑を全部手放して、また山の一部も手放して事業に投資した。山は好きだったので今でも四町歩位残っている。でも山は松食虫にやられ全滅、杉・檜はあるが、広い山のため人手を借りなければ手入れができません。

い。困ったもんだ。今はそんな時代だ、山は余り値打ちがない。

そうしているうちに小学校も卒業して高等科へ進学する。当時は三ヶ野に小学校の分校があり、高等科になると二本木の学校で三ヶ野の同年と一緒にになる。私達の高等科生は人数が多く一つの教室で七十三人、全員が賑やかな勉強だった。授業中に喧嘩したり遊び半分、でも大変面白い思い出多い学校生活だった。

同級生の中でも家の貧しい家庭の子供は、六年生で卒業して働きに出る者、奉公に出る者も数人いた。私はまだ幸せな方だった。

高等科卒業は昭和十五年三月（紀元二六〇〇年）、高校（久居農林）へ進学する者数人だけ。残りの者は家の百姓を手伝う者と会社へ就職して生活する者と別れ別れになる。

昭和十二年支那事変が勃発して、当時日本は、朝鮮、支那、満州（現在は、中国、モンゴル）を日本の植民地として、その国の人を日本で強制労働

働をさせて開発して近鉄も（昭和二〜三年）全線開通の運びとなる。また日本人も満州（モンゴル）へ行き、満蒙義勇軍として満州鉄道を開発して、国鉄職員として日本と同じ待遇で勤務していた。

学生生活もいろいろあったが、特に思い出深いのは亀ヶ広（現在茶畑）の八カ村の連合運動会だった。大三村、八ツ山村、川口村、倭村、家城町、波瀬村、高岡村、大井村の各村の選手とよく走った。倭村の茂岡君は一級上だったがよく競争した。運動は特に好きだった。思い出多い大三の学校生活も遂に終わった。

### 社会人として旅立ち

私は、家事を手伝うより社会に出て一人立ちを望んだため、義務教育も終わったので名古屋市東区大幸町、名古屋三菱重工業発動機製作所試作工場へ就職す。同時に、当工業高校夜間部に入学する。作業としては飛行機の心臓部を製作している

開発の部であった。

昭和十六年十二月、大東亜戦争が始まって益々日本国中が総ての面で激しくなり、軍需工場は生産に力が入り、夜学部の方もジス・イズ・ア・ジャツキとかいろいろ工業関係の英語も習ったが、アメリカとの戦争のため一年間でカタカナ文字は一切使えなくなつた。入社当時の月給は確か三十五円位だったと思う。当時の下宿先は守山区二十軒家鈴木方。工場から近く、矢田橋を渡った堤防の近くで、主人は竹中工務店の重役さんで、奥さんと小学校の娘さん一人での下宿生活。本当に親切で、子供のようにしていただいた。

だんだんと戦争も激しくなり、アメリカのB29が空高く飛ぶようになり機数も増してきたので、また軍需工場が攻撃の目標になるので会社に近いだけに疎開をしなければ危険なため、主人の部下が小牧の飛行場の近くに住んでいたその家へ主人共々疎開する。大曾根〜小牧線で途中の牛山駅から通勤する。この通勤はラッシュ時間は大変

だった。父も、守山に住んでいた頃から田舎の食べ物を持ってよく来てくれた。

夜間学校も四年生卒業が近づいて、航空機研究生として学ぶつもりだった。昭和十九年三月、突如異変が起きた。航空隊志願だった。

でも私は十七歳の時に湿性肋膜炎をしているので駄目かなと思つて、入院したときの大きな三菱病院の医師に相談したら大丈夫と言われたので自分は決めた。当時は海軍は十六歳で志願ができて、同級生も四人行き、二人は戦死している。

当時は、兵役の義務はあつても一人息子の志願は許されなかった。地元の警察官の許可がなければ志願ができなかった。決めた以上絶対にと…、そこで初めて父に相談したらやはり駄目。父の許さなければ駄目なため、根気よく嘆願して許可してもらった。父も昔警察官だったので地元警察官との話し合いはスムーズに解決して一件落着す。そうして昭和十九年夏、陸軍航空隊志願、合格、入隊を待つばかり。除隊後は必ず三菱に戻

り、いい航空機を製作する約束をして四年五カ月で退職す。試作工場で働いていた頃は本当に楽しかった。空襲で防空壕へ逃げ回った。名古屋での一人生活もいろいろあつた。でも全体的にはいい青年時代を過ごしたと思う。

日本国始まって以来戦争で負け知らずの日本、絶対に負けない、勝つて平和な日本で再び名古屋に戻り働くつもりで入隊の日を待つ。

#### 航空隊生活

昭和十九年十二月一日入隊。

滋賀県神崎郡（現八日市）陸軍航空隊第八教育隊第一中隊に所属（満十九歳三カ月）。

入隊前夜は、地元同級生や名古屋の友人達と最後の別れに賑やかに送別会をもらい、全員共に一夜を明かし、いよいよ出征の日が来た。

友人達はもちろん、大三村村長（茂山）さん以下全村民、全学童達に大三駅頭で出征兵士として最後の別れの挨拶をして、日の丸の旗で見送つて

もらった。

大三駅から津駅まで行き、津駅から国鉄で八日市まで行き、八日市の駅に隊の上官が迎えに来てくれた。入隊と同時に持物検査があり、千人針の中に父が持つて行けと言つて当時見たこともない百円紙幣一枚が縫い付けてあつたが見破られ、貯金通帳に入れられ、大切に私物品として身につけていた。書き遅れたが、当時の百円紙幣は見たこともない。当時、退職時でも月給五十円もなかつたと思う。

入隊から数日過ぎた頃、隊内で「中森と違つか」と上官から声をかけられ、こんな所だと思います。よく見たら、一級上の富田幹夫さん（吉永時計店）の東だった。彼は小学校六年卒業後、津中学校へ進学していたので忘れていた。彼は幹部候補生として一年前に入隊して、立派な軍人上官だった。隊にこんな上官がいるのかと心強く思ったが、それが最初で最後だった。

いろいろ初年兵として訓練も厳しかった。

一カ月も過ぎた頃、突然の移動命令が出て岐阜各務原航空隊に転属。知らぬ土地でと思つている間もなく毎日の訓練。地球儀の中へ入り両手両足を固定して電気のスイッチを入れると回転し、強、弱にしてスイッチを切る、猿の曲芸のような訓練。目が回り、地球儀から出て直立の姿勢をと言われるがなかなかできない。最初はその訓練が毎日の特訓で夜も眠れない。これも飛行機搭乗の訓練と思ひ頑張つた。

そうしているうちに、真夜中に起床して幌付の大型トラック数台に行く先知らされず乗せられ各務原を後にした。相当の時間走つて夜明け頃に着いたのが舞鶴港だった。これで海外へ送られるのが分かつた。

舞鶴港で待機しているうちにニュースが流れた。どこへ行くか行く先知らずニュースを聞いた。この港から一時間前に出港した軍艦が玄界灘で敵機に攻撃を受け、軍艦ともども軍人全員戦死だった。ニュースを聞いて間もなく我々も舞鶴を

出港した。朝鮮半島の方へ向かっているのは少しは分かるが、空から敵機（グラマン）が機銃掃射を繰り返しているのが分かる。軍艦の甲板へは危なくて出られず、船室で約二千人が過ごす。夜の航海は危なくて一切できない。

玄界灘の荒波で船室の中は揺れる。すごい悪臭、上下から出すため生きた心地がしない、軍服も汚れ放題。夜が明け始めると少し開放して空気の入れ替えをして、敵機の来ない時を見計らって甲板へ出て見るが、敵のグラマン機（戦闘機）が高度飛行から急降下して軍艦に向かって攻撃して甲板は小さな穴だらけ、敵も必死の覚悟の攻撃である。軍艦からも攻撃するが逃げるのも早いのでなかなかうまくいかない。

何日乗船したか分からないが苦しい航海でした。間もなくどこかの港か分からないが港へ着いたのが分かった。いよいよ知らない国へ上陸命令があり、順次下船する。

港は朝鮮半島の麗水港だった。でも無事上陸で

きただけでもよかったと思った。体は疲れて衣服は汚れ、生き地獄の乗船だった。

まず上陸と同時に目に焼きついたのが、港で老人が長い髭を生やして大勢が横になってアヘンを吸っていることだった。学校で習ったアヘン戦争のアヘンであることを知る。長いキセルでタバコを吸っているような調子。

上陸と同時に麗水駅から何十両も連結した貨物列車に乗せられ、貨車の外から鍵をかけられ一両に三十人位乗っていたか、窓はなく外の景色は一切見えない。途中の駅で食糧を積み込んで朝鮮大陸を突っ走る。貨車の中でローソクの火で飯盒で飯を焚く。ローソク一本で飯はおいしく炊けることを経験する。真つ暗な貨車の中でどこへ行くとも分からず日時が過ぎてゆく。何日も入浴どころか、手、足、顔さえも洗っていない状態で貨車に揺られ、漸く下車の命令が出る。

外地の軍隊生活の始まり

貨車を降りて少し行軍して到着した所が大きな飛行場、本当に広い広い航空隊であった。

朝鮮咸鏡北道連浦飛行大隊（現在北朝鮮）。兵舎に入る前に敷地内に大きな露天風呂が用意され久しぶりの入浴、こんな気持ちのよかつたことは今も忘れない。これからのことは分からないが、本当に心身共にさっぱりした。今まで着ていた衣服は全部脱ぎ捨て、航空服、作業着も一切支給された。

新品の航空服は今まで夢にまで見た航空服。全部チャックになつた絹の上下、初めて航空兵になつた実感、嬉しくて、もうどうなつてもいいという感じ、忘れられない。

朝鮮の地で軍隊生活が始まるが、ここは戦場ではないが戦争の状況がよく分かる。これではとても生きては日本へ帰れないような気もする。覚悟はしていたがやはり淋しい。昭和二十年、現北朝鮮でも漸く春の気候になつて、体も動きやすくなつ

て毎日の訓練も充実してきたが、待てど後輩初年兵が来ない。私らが舞鶴であつたように船に異常があつたのか、いつまでも初年兵。戦争もいよいよ激しくなつて来たが、我が航空大隊の飛行機（戦闘機）は全部で五十機位しかなかつたと思う。後輩が来ないので同年兵百五十人位だつたと思うが、自分は大隊長の当番ばかりしていた。

大隊長の名はちよつと忘れたが、確か静岡出身と聞いていた。非常にやさしい、よい大隊長だつた。

食事で番兵が大隊長のところへ食事を持って行くくと、我々の食事はほかの兵科よりうんとよいが、大隊長も五十歳以上で余り食べないので「貴様食え」といつも言われた。大隊長の身の回りをしていただけで他の同年兵より待遇がよかつた。体は楽だつた。

大隊長の専用機で満州（モンゴル）牡丹江近くまで飛んだことがあつたが、まだ自分一人では操縦はできない、させてくれない。一度でいいから

操縦してみたかった。

戦場へは一度も行かないが戦況は大隊長の側にいると一目瞭然、戦争状況がよく分かる。いつまでも後輩が来ないまま敗戦が近づいて来ているような気もし、大隊長の言葉にもちよつと出た。

日本国始まって以来戦争に負けたことのない日本が負けたら悔しい、我々はどうなることかと思っている時、昭和二十年八月十五日、忘れもしない朝、飛行場全体に拡声器が鳴り響き、飛行場へ全隊員集合だった。ある程度予期してしたことが現実となった。

昭和天皇の声が拡声器から流れる。

「堪へ難キヲ堪へ忍ヒ難キヲ忍ヒ……」が日本全面降伏すだった。こんな残念で悔しいことは日本国始まって以来なかったこと。すぐに故郷を思い出す。国は破れても故郷には山河がある。

第一次、第二次と二度にわたる世界大戦があり、日本も百年前（一九〇四）、日露戦争を皮切りに日中戦争、太平洋戦争と、今世紀の前半は戦

争とは無縁ではいられなかった。

我が連浦飛行場にも戦闘機は未だ残っているの  
で、天皇の声を聞くが早いか、上官に飛行機で逃亡した者もいた。でも日本海の上空で攻撃を受け日本に無事帰れる状態ではなかった。多分全機が日本海上空で攻撃を受けているのは確実。自分は当時も大隊長の当番だったので大隊長から離れることはできない。そうして大隊長から「貴様は逃げるな、俺の当番だ」と言われ絶体絶命。そうしている間にロシアの飛行機が飛行場へ。早かった、天皇の声から三時間も経っていない。

日ソ不可侵条約を一方的に破棄して（昭和二十年八月九日）アメリカと手を結び、その日のうちにソ連参戦、日本を攻撃して、日本は負けた。日本はたった一週間でソ連に負けた。

朝鮮、満州、支那の中心より北はロシアの配下となる。南はアメリカだった。私らは北朝鮮にいたが、ロシアの飛行機から降りたのはロシアの将校アベックだった。



大隊長と何か会話していて、大隊長は「俺の当番はもういいからロシア将校夫婦の世話をせよ」と言われ、負けてもやはり上官の命令で、どうにもならん状態だった。完全な武装解除となる。

### 朝鮮で拘束の体

早速ロシア将校夫婦の当番兵となる。

今まで日本の将官が住んでいた一室を空けて、私はロシア将校夫婦の身の回りから食事一切、食事を作るのは炊事当番兵のため後片付けをするだけだが、洗濯物は夫婦のパンツまで洗った。でも食事は、負けた悲しさ、ロシア人の口に合う食事を炊事当番が作って持って来る。

ロシアは貧苦の国と聞いていたが、将校ともなればどこか違う品のある夫婦であった。人間味のある立派な将校である。パン、スープも余り日本兵のように食べない。私に食べよと言う。まず言葉覚えなければと一生懸命勉強もした。教えてもらった。

同年兵の中に朝鮮出身者が三、四人位いたが、天皇の「日本全面的に降伏す」の声を聞くが早い、即朝鮮民族になって逃げ出した。前にも言ったように日本兵の上官は飛行機で逃げてもまず日本へは帰れないが、朝鮮民族は自分の国、軍人としては平等であっても民族としては見方が違う。日本も朝鮮を植民地としていろいろ酷使して来たから止むを得ない。

今までは日本国軍隊の兵舎であっても、負けたら自由にならない。ロシア将校夫婦の命令で大隊長以下は動かなければならぬ。ロシアの将校以外にロシア軍人は来ない。今まで日本は朝鮮民族を奴隷のように酷使して来たが、今度は逆に日本兵の言うことは絶対聞かなくなった。朝鮮人は自分の土地であるし、日本人は日本海の彼方、一時は負けたロシア人より朝鮮人の方が脅威に感ずるようにもなった。言う事を聞かないどころか、夜にもなると兵舎の金網を破って盗みに入る朝鮮人、負けた日本軍はどうにもならぬ。私ら航空兵

は腰に拳銃は必ず持っていたが敗戦と同時に取り上げられた。将校の軍刀だけは取り上げなかった。下士官以下は武器を全部没収された。丸裸のため、盗みに入ろうとする朝鮮人に武器がないため竹槍を作って衛兵に立つ。軍隊当時と同じように怪しい人影を見ると「誰か」を三回言つて、応答がないと竹槍で殺す。竹槍の先に油をつけると衣服の上からでもよく刺さる。そんな経験もしたが余り語らないことにしている。衛兵に立つたり兵舎の中の片付けもしなければならぬ。

数カ月しかいなかったが、いよいよ連浦飛行場全体をロシア側に明け渡さねばならないようになって、今度の集合地へ運ぶ兵舎内の衣食類、物品を引き揚げなければならない。

そこで今までのように朝鮮人を使って馬車で引き揚げようと思つて依頼する。戦前だったら少々運賃が安くても二つ返事で仕事をしてくれたが、負けたら全然将校の言うことも聞いてくれない。逆に反抗して来る始末。完全に元日本軍隊はなめ

られていた。朝鮮人の余りの言動に日本将校は怒り爆発して、我々隊員の面前で軍刀で切り捨てた。敗戦といえども帝国軍人だったのだ。将校も頭に血が上つたのだろう、もうどうにでもなれだった。朝鮮人が面前で切られたのをほかの朝鮮人が見ていて、恐さの余り兵舎内の総てを漸く引き揚げた。

朝鮮興南港の近くへ移動する。この港は引揚船の着く港と聞いていたので、日本へ帰れると全員胸躍らせていた。そこには日本人留学生の興南高等女学校があつた。敗戦と同時に勉強どころではない、女学生も我々と同じ日本へ帰ることを待ち望んでいる。でも若い日本人女性であるがため、朝鮮人にもものすごい虐待に遭つていと聞く。女教師はもちろん、女生徒全員が胸を押さえ頭を丸めて男装する。軍服を着ていた。

そうしているうちに我々の引揚船が来たというので、女学生より先に帰れると思ひ、帰ったら女学生の家族の方へ（元氣でいる）と知らせせてやら

なければと自筆の手紙を我々隊員が生徒から十通位ずつ預かって、興南港から見送られながら出港した。

いよいよ日本へ帰れると思ひ故郷を描きながら胸躍らせていたが、どうも様子がおかしいと思うようになった。それもロシアの大きな船、そうして案内（船内）が「ウラジオストック回りで日本に帰る」と言う。ウラジオストックへは馬を積んでいるから降ろして日本へと。だが船内には、我々より先に乗船した日本軍人が書いた「この船、魔の船」と大きな字で落書きが無数にあつた。

薄暮に小さな港に着いた。時、昭和二十年十月ちよつと過ぎくらいだったと記憶する。入隊してから僅か九カ月半で敗戦になり、しかも外地で拘束の身となり、何と不運な人生かと心から情けなく淋しく思った。

## シベリア抑留生活

薄暮の小さい港へ着くと下船命令がある。どの港か分らず甲板から陸を見ると、髪の毛の赤い男女が見守っている。大きな船のため港へ横着けができないので、棧橋を掛けて一人ずつの上陸だった。陸上で我々を見つめていたのはロシア人だった。ここで初めて完全に騙されたことが分かった。完全な捕虜であることも分かる。

日本帝国軍人として初めて捕虜であることを味わわなければならない。何が何だかサツパリ分からん、頭の中は真つ白。敗戦から二カ月位たったと思う。シベリアの十月はすごく寒かった。

下船した港がナホトカであることは後日分かった。零下一〇度以下の港へ降りて防寒の服装はななく、我々は望みも完全に失い、興南の女学生から預かった家族へ渡す手紙も総てがパーとなった。夜ともなれば零下二〇度近い寒い寒い夜行軍だった。約二千人位一緒だったと思う。各自、航空兵用のリュックサックを持っていたが、中には日用

品少々と、一生の記念品として連浦飛行場へ着いた時支給された航空服と、入隊時に千人針の中に父が入れてくれた百円の通帳だけ。着の身着のままで毛布一枚だけ支給された。

シベリアの酷寒の夜行軍は想像を絶するものがある。シベリアの大草原の中で野宿、毛布一枚では眠ることもできず、放心状態となっている。何の目的でどこへ行くかも分からない、ただ歩くだけ。途中自炊して二日間位、着の身着のままシベリア大陸を歩き続けた。

そうして漸く到着したのが「スーチャン」という炭鉱地帯。敗戦一週間前に参戦して日本に勝ったが、捕虜収容所の準備は全然なし。ロシア国そのものが貧しいためできない。

スーチャンの生活が始まったが、シベリアの十月下旬は本当に寒い。建物がないので大きな天幕生活。軍服、軍靴のまま天幕の中に寝るが、毛布一枚では寒くて寒くて眠れないが、隣に寝ている戦友と必ず生きて故郷に帰るんだとお互いに励ま

し合って、疲れもあるので寝てしまう。朝、目が覚めると天幕の中へ氷柱が下がっている毎日。ゆうへまで元気で励まし合った友が、朝になったら冷たくなって死んでいる。日時が過ぎて行き、だんだん体力が弱っていくのがよく分かる。寒さと飢え。食事は黒パン（麦の皮まじり）一枚と飯盒のフター一杯の具のないスープ、それが三度ある。それだけでは栄養も何もゼロだ。

スーチャンの収容所には約二千人位いたが、我々航空隊の戦友は多くいない。他の兵科や海軍の若い兵隊、十六歳位で志願した海軍の兵隊もいた。収容所には他の隊からも来ていて、知らない、バラバラ、自分の当番した大隊長もどこへやら。他の将校、将官級も一緒に生活したが、どうしても歳が多い人ほど体力が衰えるのが早い。

体力のない者はポツポツ死んでいく。だが我々捕虜をいつまでも遊ばさない。ロシアのドクターが来て体力検査をして、一―八まで番号を付けられた。

一は炭坑作業。穴の中へ入り石炭掘り、言えば一番健康な体力のある者。

二は、一の掘った石炭を地上で選別役。

三、四は、地上の建築とか土建屋仕事。

五、六は、収容所の周りの雑役作業。余り体力がない。

七、八は、病弱者で体力のない入院者。

自分は一で、まだ若い（二十歳）。体重は減っているが炭坑の穴の中は暖かい。腰にバッテリーをつけてヘルメットにランプをつけ、石炭を掘る体力はまだあった。鉱山の穴を奥へ奥へと石炭を掘って進む。穴は人間が漸く立てる位の穴で、線路を引き、トロツコへ積んで地上へ運び出す。穴の中で作業するのは、ロシア人の労働者の指導で日本人、ドイツ人、ユダヤ人、白系ロシア人の皆捕虜。白系ロシア人は同じ民族でありながら、一九一七年のロシア革命当時の皇族だったが全部ロシアの労働者の手に渡ってしまった。

穴の中は真つ暗でランプの光で照らす、掘り

起こしているとするはしの先がピカピカに光っている。他国人と一緒の穴の中で仕事をしていると、あちこちでピカピカ光るので本当に地獄のような毎日の作業。初めの頃は全然言葉が分からないので大変だった。まず言葉を覚えなければと思いい、苦勞し一生懸命勉強もした。一生懸命仕事をしたら少しでも早く故郷へ帰れるかなと思つて頑張った。

石炭掘りも慣れるに従つて穴の中は暖かいし、地上の作業をしている者や戦友よりうんとよい。地上で作業している者は寒さと飢えてボツボツ死んでいく。必ず故郷へ帰ると心に定めて頑張った。自らの係のロシア人指導者が、ヤポンスキー・マーリンキ・ラポータ・ムノীগ・ハラシヨ（日本人は体は小さいが仕事をよくする、よろしい）と、いつも褒めてくれる。係の指導者もやはりノルマ（仕事の量）があるため、多くすると喜んでくれる、待遇は非常によかった。他国のドイツ人（ゲルマンスキー）、ユダヤ人は足が大きく、

白系ロシア人はやはり上品な者ばかりで余り仕事をしない。「働かざる者食うべからず」の国、日本人はよく働く、でもこれは一日も早く故郷へ帰りたいためである。坑内へは食物は持ち込めない規則でもあるが、係の指導者が内緒で収容所で食べるより上等のパンを持ち込んで、よく食べさせてもらった。ありがたかった。

坑内の奥へ進むにつれ、落磐しないように柱を組んで奥へ進む。穴の中は真っ暗、落磐したら必ず死ぬ。たまたまそんな現場も見た。いつ、どんなことが起こるか分からない炭坑作業、命がけの仕事、でもよいこともある。

第一に穴の中は暖かい、寒さ知らず。

第二に重労働のため食糧（パン）が多い。

地上で働く他のグループは寒く、パンの量が少ない。体力のないところへ、寒い日は零下三〇度はいつもあるが、二〇度位までは防寒具を着て作業する。やはり体力がない者はバタバタと目の前で死んでいく。何とも言えない無念さ、想像を絶

する。飢えや寒さと闘うが、死亡者は初めの一年間が極端に多かった。極限状態にあつて人はどこまで耐えられるか、希望と絶望の生きる力を教えてくれる。日時が過ぎるにつれ、収容所の環境もよくなり、バラック建築ではあるが、中ではペーチカ（暖房）も自分らの掘った石炭で暖かい。

炭坑作業は三交代で毎週変わっていく。収容所から炭坑地まで片道約二十分位歩く。軍隊当時と同じく四列縦隊で往復するが、ロシア兵が前後左右に銃を持つて逃げないように監視する。銃といえども一度引金を引くと七十二発の弾丸が出る、小さい型の銃であるが機関銃である。少しでも隊から横に出ると銃床で所かまわず殴る。失神する者もいた。

そんな生活も日時がたつにつれ慣れてきたが、やはり地上作業者は死者が出る。死者を見る度に、今度は我が身かと誰しも思つて生きてきた。その点、炭坑作業はよかつたなと思う。余り寒い生活をしないで、十分とは言わぬがマアマアの食

の量もあるので健康体だった。

先ほど話したバラック建築の収容所も皆、日本人が建てた建物である。日本人捕虜の中でもいろいろ職業を持つ者がいるので大変便利である。そうしているうちに、スーチャンへ来てから一年も過ぎると収容所内は見違えるようになった。

収容所から炭坑地までは歩くので寒い、室内はペーチカで暖かい。窓の外は極寒、ぬれタオルでも出したら瞬間ピンと凍る。小便でもすぐ凍る、寒い冬は零下六〇度位までなった時もある。

敗戦国、日本軍隊も捕虜になったら上下はないと、一年位たつてから若い者から声が出始めた。それも今まで一年間位は、捕虜でも軍服しかないから着ているので将校、下士官は厳しかった。

最初の頃は収容所内で食事当番があり、当番が将校、下士官に量も多く、若い者は少なめにして上官を立てたが、上官はまだ足りずいろいろ文句を言つては若者の食糧を取り上げて食べる。それでも何とも言えず黙って耐える、それが軍隊だつ

た。一年間で、そういう上官の言動で餓死した友も多くいた。一時は日本人同士で上下で争い事をして死んだ者もいる。事実を黙認していた。

この頃から民主主義目覚める

日本は敗れたのだ、軍隊はないのだ、皆平等である、いつまでもこんな状態が続いては若者は全滅すると言ひ、若い兵隊が立ち上がった。

将校、下士官より兵隊の方が頭数は遙かに多いので、日本にはもう軍隊はないのだ、今言う民主主義である。当時は収容所の建物も大きくなつて、この収容所に約四千人位いた。

これまでの間は、将校、下士官は全員階級章をつけているので怖くて言ひ出せなかつた。収容所内の大隊長一人、中隊長四人、小隊長数人を選挙で投票して一新することにして、投票の結果、一番若い海軍志願兵（十七〜十八歳）位の元氣のいい奴が大隊長になつて、絶対服従になる。将校も下士官も階級章をはずして一般人になる。

中隊長四人の中の一人が自分であった。やはり若いし、まだ体力があった。一個中隊約千人の頭として選ばれた。そうして小隊長、班長等を選任して、今までの上官も皆配下にして指揮した。これで異国の地で文句でも言ったら生きて日本へ帰れないことは、今までのことがあるから承知している。酷寒の地シベリアへ抑留され、飢えと寒さにさいなまれながら、また旧日本軍の上官にまでいじめられ、炭坑夫あるいは地上建築等過酷な肉体労働に従事して鉦山で働く。凜然たる寒気、迫り来る飢餓、絶望によって生命を極限にさらされたが、若者達の指揮によって将校、下士官は今までのようなことができず、約一年間に若い兵隊を死に追いやったことも後悔してか、また年齢も兵より遙かに多いので若者に従うしかなかった。

そうしているうちに、約二年位スーチャンの炭坑地で作業に従事したが、病弱者は日本へ送還されていくことも耳に入ってきた。

いよいよ移動命令が出て、あわよくば日本へ帰

れる（ダモイ）かと思つたが、大隊の半分位、自分も含むが、ウオロシロフの地で、今度は一変して農作業だった。二年も過ぎると気候にも慣れて、言葉も日常語が話せるようになり、ロシア人との会話も楽しく一日が過ぎしやすくなつて来た。

畑仕事と言つても主に馬鈴薯（カルトシカ）作り、見渡す限り山一つない大農園地である。一区切りの畑が二十四町歩（一町歩は十反）で区割りしてあり、碁盤の目のように地平線上にある。カルトシカ作りも全然手作業はない。広過ぎてできない。耕作から種芋の植えつけ、収穫も総て軽飛行機で仕事をする。軽飛行機の操縦も教えてもらい、面白い毎日の仕事だった。これもちよつとの暇もなかったが航空隊で習つたお陰。

畑の周囲には深い側溝があり、畑の水やり用ポンプにてきれいな水が流れている。溝には八ツ目鰻、大鰻がたくさんいる。ロシア人は長い大きなものは絶対に食べない。日本人が喜んで食べると



不思議な顔して見ている。

農作業をしながら、木綿針を焼いて曲げて糸をつけて餌なしでも釣れる。チラチラするから炭坑作業より遙かに仕事は楽で楽しい。私はまだ飲んだことはないが、農場主が一生懸命仕事をするロシアのウォツカを持って来てくれる。酒の好きな同士は飛行機の燃料を盗んで飲む者もいたが、目をやられ、鳥目になる。ひどいのは失明になった者もいた。そんな時八ツ目鰻は目によいと言いついていた。当時は味付するものがないが、岩塩（氷砂糖のようなもの）を溶かして、鰻に塩分を含めて食べた、うまかった。捕虜になってこんなうまいものは食べたことがない。また馬鈴薯も作っているのです、飯盒で茹でて食べる。寒い所でできた馬鈴薯は本當にうまい。収容所で食べる食事よりうんとうまい。

腹いっぱい食べる、農場主も何も言わないで笑っている。故郷へ帰ることも一時は忘れることすらあった。このコルホーズ（農場）の仕事も半

年位だったと思う。また移動の命令が出るが、どうも故郷へ帰れそうな雰囲気でもなかった。

今度はチタという地名の所。ここは今までの収容所の気候と違い、大分北のためものすごく寒い。コルホーズにいた時と大違い。そうなるとうち故郷へ帰りたい。本當に寒い地、シベリア。

ウォロシロフより規模も小さな農場で数カ月いたら、突然十人位引き抜かれた。自分もその中の一人。マイクロー車で連れて行かれ、相当の遠距離を走って着いたのがロシアの首都モスクワである。今までの収容所の環境とまるつきり違う大都会、これでは今までの同志とも皆別れ、故郷へも帰れないと本當に思った。どうすることもできない。

立派な建物の中に入ると、ロシアの将校が出て来て「君達は今日から三カ月間、ロシア共産党の幹部教育を受ける、一生懸命勉強してくれ」と言つて、待遇は抜群、龍宮城へでも行ったよう。たった日本人十人だけ、狐につままれたよう。

住まいはよいし食事も上等、まるで留学生のよう。でも内心はものすごく不安。若い学生風の通訳がいるが、日常生活が違おうし、故郷へ帰してもええなとも思った。共産教育と言っても、そんなことは少しも念頭にない。好きでこの地へ来たのではない。

話の内容は分からない、全くどうすることもできない。時には若い学生風の通訳が、冗談ではあるが、ロシアへ帰化しないかとも、帰化して、ロシアの将校にするとか。故郷には家族が待っていてくれる、一日も早く帰りたい。少数の日本人、いろいろ話し合って逃亡すら考えたが、逃げきれないのは重々知っている、できない。

生活環境が余りよいので、故郷のことを思いつつ日が早く過ぎたような気がした。

三カ月位だったと思うが、分らんことを毎日聞かされたがそれも終わったら、今度は国鉄のよいうな汽車に乗せられた。どこから来たのか乗車してみると日本人が多く乗っていたのでやっと安心

といったところ。モスクワから相当の時間、一昼夜位乗って降りたのがナホトカだった。

ナホトカと言えば忘れもしない、約三年前に朝鮮の興南港から興南高女生徒らと別れて騙されて着いた港である。

当時は本当に小さな港で棧橋をかけて下船したのが、こんな大きな港になっているとはびっくりした。これも日本人捕虜が大きな港に改港したと聞かされた。大きな軍艦、大きな船舶が港に横付けされている。

この港から日本人捕虜は多数日本へダモイしていると聞く。自分達も漸く日本へ帰還できる一筋の希望を持つてその日を待ち続ける。故郷へ生きて必ず帰るんだ、と約四年間よくぞ頑張った。本当に苦しい苦しい毎日だった。

港近くの収容所に入り、毎日ナホトカ港を見つめながら簡単な作業をして帰還船を待つ。日時は過ぎて行くが何の沙汰もない。でも、ロシア人でもいい人が多くいて、日本人の帰還状況を知らせ

てくれる。ナホトカまで来たら順次、日本船が迎えに来たら帰れると聞かされた。今までは帰れると言つて外国船、騙されてばかり。今度は必ず日本船が迎えに来てくれると聞く。

昭和二十四年七月ではあるが、ロシアは寒い。地面は完全に凍つて三十センチ位の穴も掘れない。住んでいた所は余り雪は降らない、雨も余り降らないが、何と言つてもシベリアは極寒の地、本当に寒かつた。口では言い表せない苦勞もし辛抱もして、耐えに耐えて今日があつた。

炭鋳作業も二年位したが、坑内の時間が長いので他の人よりは寒さは少ない。気候にも慣れてきた頃にコルホーズの農作業も軽飛行機に乗つて仕事をし、モスクワでも短い生活だったが捕虜でこんな生活をした者も多くはないだろう。運もよかつた。

ナホトカ港の近くに日本人墓地がある。寒氣迫り来る飢餓、絶望によつて、故郷を夢見ながら多くの同志が死んで行つた。本当に残念だつたらう。

う。無念だつたらう。シベリア最後のロシアの永久凍土において、尊い命を散華された同志諸氏の冥福を祈念する次第である。

長い長いシベリア生活の中で、満足にシャワーを浴することなく、手、足はもちろんのこと、炭鋳作業の落盤、南京虫、虱等に悩まされ、よく耐えたと思う。

漸くシベリア生活も終止符を打つ日が来た。ナホトカ港へ日の丸の旗を掲げ大きな船が横付けした。船は日本赤十字病院船（高砂丸）だつた。乗船する時に、これで故郷へ帰れるんだ、生きていてよかつた、涙が出てどうしようもなかつた。嬉しかつた。シベリアの四年の生活が走馬灯のように頭の中を駆け巡り、子供のようになつて無邪気に手を取り合い、抱き合つて喜んだ。ダモイに明け暮れ、ひたすら奴隷のように過ごしたこと。

乗船する時は足が宙に浮いていた。

亡き同志の墓地を後にして、いよいよナホトカ港を出発する。何とも言えない気持ちであつた。

## 五体満足で復員

一路、舞鶴港へ向かつて船は進む。

船は日本赤十字の病院船である。「高砂丸」立派な船。この船はナホトカ港へ何度か日本人を迎えに来てしていると聞く。舞鶴から戦時中に朝鮮麗水港まで乗った船とはまるつきり違う。同じ日本海を通るも少しも揺れない。船内は畳敷き、畳はいつから見てないか忘れる位。病院船でも、病人は一人もいない、皆元気。余計に元気が出る。

宇治山田の赤十字病院の看護婦さんばかり。日本を離れてから日本の女性は見たことがない。朝鮮興南女学生は男装していて、別人のように見えた。健康な者ばかりの引揚者であるので看護婦さんは楽で、待遇がよい。まず船長以下全職員が、元気で帰った労苦を労ってくれた。嬉しかった。

昭和二十四年七月二十日過ぎ、自分は二十四歳に一月月足りない。約二千人の引揚者、船室へ入り、元軍人らしく小さい班に分かれ、戦後の日本、故郷の話を見守る看護婦さんに次から次へ聞き出

す。

こんな時すぐ脳裏に浮かぶのは、やはり共に苦勞した興南の女生徒はどうしたのだろうと頭をよぎる。無事帰っていてくれることを祈る。

船室で話は絶え間がない。皆満面の笑み。看護婦さんは宇治山田の赤十字病院勤務の人だから三重県出身者が大部分だった。この船に乗っている約二千人中で三重県出身者は自分一人だけだった。

そこで話が弾んで聞き出すと、一志郡の出身者が数人いたが、その中に一人、八ツ山稲垣の「木田つる」さんがいた。もちろんお互い知らないが、本当に懐かしく、手に取るように家のことが分かって来た。

木田看護婦さんの両親は、なんと家の田植えや山の手入れに来てもらっていると聞いてびっくり、家のことは総て知っていた。

出征兵士として日の丸の旗で送り出されて四年八か月、無傷で復員できたのは今なお生涯忘れ得

ぬ思い出である。この時ほど故郷のありがたさを感じたことはない。いろいろ話を聞かされているうちに舞鶴へ入港することを聞き、下船準備をする。木田看護婦さんにも再会を誓って降船する。

昭和二十年八月十五日、朝鮮、旧満州、支那等の地で敗戦を迎え武装解除された日本兵らは、ソ連当時の指導者スターリンの指示でシベリア及びモンゴルの極寒の各地の収容所にて炭鋳作業、森林伐採、鉄道建設の強制労働に駆り出された。

厚生省の調べによると、抑留者はモンゴルを含めて約六十五万人とか、うち約四十万人が帰還したとか、残りの未帰還者は寒さと飢えで死亡したと推定されるが、これも正確な数字は把握できないとされる。私の知る人でも、故郷へ帰っても親族のいない人はロシアへ帰化する者も稀にあった。

上陸と同時に引揚援護局の職員の前で各県別の名簿が出され、自分の名前を消してサインするが、引揚者約二千人の中に三重県出身者は私一人

だけだった。それも名簿は九五%消してあった。どんな人かは知らないが、三ヶ野の栢木さんの名はまだ残っていた。最後の最後だったナーと思っ

た。  
ここで初めて日本人になった気がした。まず検査を済ませて、裸になって大きな風呂へ入る。

今まで肌身放さず命から二番目位に大切に四年間持っていた思い出の品、絹のチャック付新品の航空隊服と、父に入隊時にもらった百円入りの貯金通帳を入り口の所へ置いて入浴する。

外地へ行ってからは戦時中、朝鮮連浦飛行場では入浴もしたが、敗戦後は一度も入浴していない。炭鋳作業の時はドイツ、ユダヤ、白系ロシア人と共にシャワーで体をこすり合って浴しただけ。最高の気分が入浴から出るが、出口が違う。そこには元陸軍の兵隊の新品の服一揃い置いてある。尋ねたら、外部から持って来たものは没収するとのこと。大切に四年間も持っていた宝物は一瞬にしてなくなった。航空兵に志願してまで入隊

したが、写真一枚もない、残念だが仕方なし。

でも無傷で日本へ帰れたことは何よりだった。

昭和十九年十二月出征してから昭和二十四年七月三十日復員するまで約五年、日本は完全に変わっていた。まず警察官。出征当時はキリツとして警察官らしく制服で、長いサーベルを腰に下げていた。が、見れば作業服のような服を着て腰に丸太棒、とても警察官とも思えず、引揚者との乱闘騒ぎも舞鶴であった。耐えて酷寒の地から帰った憂き晴らしだったかも知からない。

それに貨幣価値が大違い。出征当時父からもらった千人針の百円紙幣は見たこともなかったが、舞鶴で小遣か手当か分らないが一人三千円ずつもらった。こんな大金と思いきや、ちよつとしたものを買ったら何千円、本当に呆れて言葉が出なかった。戦争に負け日本軍人として味わつたことのない捕虜となり、しかも極寒の地で重労働をさせられた日本国の犠牲者でもある。

舞鶴で二、三日泊まって検査も済んで、いよいよ

よ我が家へ帰る日が来た。

舞鶴より京都の駅までは他の県の同志もいたが、京都駅で一人になったら父と中尾の兄貴が迎えに来てくれていた。音信不通の四年間、肉親に会って本当に嬉し泣きで涙が止まらない。

京都駅では日本共産党が入党者を募集していて、入党する同志もいた。モスクワでちよつとは教育を受けたが、日本の状況が分からないので家へ帰ってから様子を見ると言つて入党しなかった。

京都駅で同志と再会を誓つて別れた。

三重県出身は自分一人のため、迎えに来てくれた父と中尾の兄貴と三人で名張駅まで来た。

名張駅から三両連結の電車で、中の一両は自分のため空いていた。三人で乗り込むと、名張高校の生徒がホームに整列して、同時に生徒代表がお茶を持って自分の所へ来て「長い間ご苦労様でした」と言つて、飲み終わるとホームへ生徒が出て万歳してくれた。自分もびつくりした。父らも感

激した。長い間の国の犠牲者でもあるがため、嬉しかった。

そうしているうちに出征のとき日の丸の旗で送ってもらった当時と変わらぬ懐かしい大三駅に着いた。

### 自分で食べて行ける人生設計

昭和十九年十二月一日、この大三駅ホームで出征兵士として大三村村民全員に別れの挨拶をして日の丸の旗で送ってもらったそのホームへ再び元気な姿で復員できたことは感無量、涙が溢れ、どうしようもなかった。

その日、昭和二十四年八月初日（丸四年九月）。ホームには日の丸の旗でいっぱい復員を祝ってくれた。大三村村民全員と言っても過言ではない、こんな幸せなことはない。

丸四年も酷寒の地シベリアに抑留され、飢えと寒さにさいなまれ、一時は痩せこけていた時もあったが、今ホームに降り立った時はなんと二十

貫（七五キログラム）体重があり、堂々とした体であった。これも前に申しましたように、寒さと飢えがしのげた炭鉱作業またはコルホーズでの労働だったためであるのと、うまく捕虜生活を送ったためと思っている。

話に聞けば、敗戦後は、先に帰った者は村民に日の丸の旗で迎えてもらった軍人はなく、夜こそそと家に帰ったそうさ。無念だっただろう。

ホームに立って、迎えに来てくれた村長以下村民に挨拶をして、村長から復員の祝いの言葉をいただき、次に岡の太田幸雄さん（今は亡き人）から歓迎の言葉ももらった。特に太田さんはやはりシベリア生活を二年弱位して復員した先輩でもあった。そうして、こそこそと帰った組でもあった。敗戦後、日の丸の旗で村民に迎えてもらったのは、遅かったためか自分だけのようにも聞いている。

村長と自分先頭で大勢の人に我が家（浜城）まで送ってもらった。家には苦労人の大切な母が

待っていてくれた。涙が出る出る、本当に嬉しかった。我が家と言っても、昭和十五年四月に名古屋三菱に就職してすぐ出征したため約十年は住んでいない。その夜は親戚をはじめ近所知人を呼んで盛大な復員祝いしてもらった。もともと父はそうすることが好きなタイプだった。

その祝賀会の場で聞いた言葉「赤が帰って来る」、それも回覧板で大三全体に知らされていた。もし自分がモスクワで三カ月の共産幹部教育を受けたことを知られたらどうなっていただろう。抑留されるまでは共産党は知らなかった。引揚げした舞鶴港でも、前記したように、ロシアの共産党と日本の共産党の違いもあるようで、様子を見てからでもと思って入党しなかった。年月が過ぎても「スターリン」は、善悪は別として大した人物でもあったようだ。

復員はしたものの、明日からの生活が頭をよぎる。出征前に除隊後の約束をした名古屋の三菱

も、敗戦で、航空機の必要がなくなつたためもちろん就職はできない。

ロシアでも「働かざる者食うべからず」だった。戦後の日本も戦争で総てを失つたので一日たりとも働かなければ生活できない。これから我が生きる道を考えなければならぬ。

食わんがための悪戦苦闘の始まり

やはり父は事業家だった。大三駅下（現在地）は地主酒井氏（津市長）の土地であったが、その土地を買って、自分の復員時は飲食店をする傍ら精米、製麵、キャンデーを製造していたので、父を手伝って家の仕事に頑張った。

復員の昭和二十四年八月より昭和二十五年三月の結婚まで約八カ月の間は父と仕事を共にした。結婚と同時に妻と二人で夢中に頑張った。

父が実家の方でやはりパン製造、洋菓子を、職人を使って事業を始める。ここで独立。妻は飲食店の仕事で、自分は主に精米、製麵、キャンデー



の製造に専念する。

キャンデーは夏期だけの仕事なので、暑い日は大きな荷台の自転車で、周囲を氷で囲んだ箱にキャンデーを詰めて真夏の真昼に鈴を振って売りに毎日走った。色粉で色をつけ、砂糖は高いのでサツカリンを使って甘味をつけたのが一本三円。アズキを三、四粒入れたのが一本五円だった。夏の夜の行事がある所には、大三はもちろん、川口、八ツ山、倭、家城までも総て売りに走った。当時キャンデーは近くで製造していないので、珍しいのでよく売れた。面白かったが疲れもした。また、米の収穫時になると、一志米はおいしいと言つて大阪から闇米を買い出しに大勢が来る。大三、川口の農家で一人二俵位買つて、電車で大阪まで運んで大阪で高く売つて利益を得る。家で精米もしているのので、精米も忙しい位我が家も利益が相当あつたが、そんな大阪人を見ていると自分もやってみたくなり、闇米買いもして大阪人に売り付けて、少しの利益でもと思ひ働いた。

シベリアの抑留生活から比べればどんなことでもできる。食べ物は、余りいいものは食べられないが満腹になる。妻と二人、家業に励んだ。疲れでも楽しい生活だった。

書き遅れたが、自分には姉と妹が一人ずついて、姉は早稲田大学卒の立派な義兄と結婚していたが、妹は、自分が消息不明のため父に叱られながら家事を手伝っていた。感謝している。妹には飲食店の仕事も随分手伝つてもらつた。

飲食店の傍ら他の仕事もしているうちに、いつまでもこんな仕事だけでは物足りなくなつた。駅前で飲食店をしていると食事に来たお客さんがタクシーを呼んでくれと言う。当時、家城に家城タクシーが二台で仕事をしていたので、「これだ」と思ったのが始まりである。

やっぱりこれも事業家、父の発想であつた。シベリアから引き揚げて来てすぐ家業ができたのもやっぱり父、なんののかんと言つて叱られたが、やはり父のお陰と感謝している。

父の発想は確かによいが、そこからがまた苦  
勞。昭和二十八年に飲食店の傍らタクシー事業の  
營業免許申請に取り組んだ。

当時はまだタクシー事業は少なく、久居交通  
と家城タクシーだけしか一志郡にはなかった。名  
古屋陸運局へ申請しても、地元で反対業者がいれ  
ば反対聴聞があつて駄目になる。お客は当時はそ  
んなにない、金もないので、利用者が一人でも少  
なくなれば利益がないので久居、家城は猛反対。  
申請してから約一年間位は名古屋陸運局へ足を運  
んだ。いろいろな手を打つてむずかしい免許を一  
年がかりで漸く取得した。

それにはいろいろ裏もあつた。頑張つた。  
昭和二十九年より旅客自動車運送事業を開業す  
る。

事業の方も妻と二人では手広くできないので飲  
食店だけにして、精米、製麺工場を改造して自動  
車の車庫にする。当時は子供二人がいたので、飲  
食店と子育てとで妻も大変だつたと思うが、よく

頑張つた。

そうして月日がたつにつれタクシー客も多く  
なつてきたので、飲食店を廃業してタクシー一本  
に絞つて事業に専念する。

今は本当にいい世の中だと過去を振り返る。自  
分達で必死に働き続け、家財道具もボツボツと揃  
え、子供達も小学生二人とまだ小さいが一人、子  
育てにも妻と頑張つた。

小学校時代、高等科時代、名古屋生活時代、軍  
隊生活、そうしてシベリア生活、鼠から猫、犬、  
何でも口に入るものは皆食べて、生きるためにこ  
の世に生を受けてから今日までが走馬灯のように  
浮かび上がり、熱い思いが込み上げてくる。

世界に戦争がある時代にこの世に生を受け、約  
八十年の間、悪戦苦闘の連続で今日に至る。戦争  
のない本当に静かな世の中は確かによい。が、心  
の締めりがえてしてなくなる。民主主義も多少意  
外な方向に進んでいる面もあるように思う。

海外旅行にもツアーで妻と共に、また一人でも

行ったが、米国、ロシア、中国は特に印象に残る。

中国は茂岡さんのツアーで毎年行ったが、モンゴルは行ってない。ソ満国境の近くに軍隊当時に少し住んだこともある。

最も印象に残るのはやはりロシアの旅である。

平成六（一九九四）年に名古屋空港から国際ロータリーのツアーに参加したが、七人だけだった。七人と言っても自分以外はロシア見学、何も知らない若い人達との八日間の旅でした。

抑留生活四年間に片言交じりに覚えたロシア語、四十六年前を思い出して、古いマイクロバスで八日間同じ添乗員（日本語を習う女子大生）とナホトカ、ウラジオストツク、スーチャン、ウオロシロフと、抑留された収容所の辺を見て回る。

昭和二十四年七月に引き揚げたロシアとは完全に変わっていた。

まず気候、地球温暖化により、気温は抑留された当時は真冬ともなれば零下六〇度にもなった

が、添乗員の説明ではそんな寒い日は一日もないとのこと、旅行日も確か九月の下旬頃だったが余り寒さを感じなかった。当時の面影は全くなく、道路も広く真っ直ぐではあるが、舗装はまずい。山一つ見えない広い大きい大地である。

車も多く走っているが皆古い車で、日本車も横に会社名を書いたまま走っている。やはりまだロシア全体は貧しいようだ。

建物は、日本人捕虜によって建てたので大きい建物が多く並んでいる。

各地区の収容所であった所には必ず日本人墓地がある。悲惨な戦場または抑留者の現実は、今は語り草となり、歳月の流れに人々の記憶から遠ざかりつつあります。戦争という生死の対決の中で九死に一生を得た我々は、幾多の英霊を偲び感謝の黙禱を捧げます。尊い、余りにも多くの犠牲者の上に今日あることを忘れてはなりません。

一九四五年日本敗戦後は、平和の道を歩み続けている一方、戦争体験を忘れつつある。航空隊を

志願してから今日までのことがいろいろと頭をよぎるが、また忘れ去ったこともある。自分達の時代はこんな波瀾万丈の時代でもあった。

「忘却とは忘れ去ることなり、忘れ得ずして忘却を誓う心のかなしさよ」、こんな一句も。

最近、全国強制抑留者協会三重県支部の会員にもなり、年齢とともに数少ない会員と抑留生活を語り合っている。一志郡でも数えるだけの生き残り者。

近くシベリアの犠牲者の墓参旅行もある。健康であつたら必ず参加するつもり。

シベリア引揚げより五十有余年過ぎた今日、各地の墓地を参拝して黙禱を捧げます。

現在は子供、孫達と幸せに生活している。

### 【執筆者の紹介】

私の中森讓氏を知ったのは三年ほど前である。

私が友人三人とある居酒屋で一杯飲みながら雑談をしている時、たまたま私がソ連抑留生活の話を

友人にしていたとき、隣の客から「貴方、ソ連に抑留されていたのですか、私もソ連に抑留されておりました」と話しかけられました。そこで「何年に帰りましたか」「収容所はどこだったのですか」と、ソ連抑留の話が進み、この時初めて隣町でタクシー業をされている中森氏を知ったのです。これまで白山町の中森タクシーを知っていたので、社長の中森氏であることがわかりました。

ちょうどその時期に、私は全国強制抑留者協会三重県支部の設立準備委員として会員募集を進めていたときでしたので、中森氏に会員として加入をお願いしたところ、快く加入していただきました。

本年五月、支部総会が終わり、抑留者の労苦調査手記を書いていただく方がないかと模索しているとき、中森氏から「私の生涯を子供達に残したい気持ちから拙い文章を作りました。一時、私費で出版をと考えましたが、とてもそのようなことは無理とあきらめました。もし、協会の方で他の

方と一緒に出版されるのであればよろしくお願いします」という手紙をいただきました。

この手記は、中森氏が自分のたどって来た生涯を子孫に残したい気持ちから書かれたもので、まだ若い子供夫婦にも見せていないとのことですが、記録そのままをコピーしたものです。

(三重県 森 勇生)

## シベリア抑留記

滋賀県 中島 信一

昭和十八(一九四三)年徴兵検査において第一乙種合格、現役兵として昭和十九年一月十二日に関東軍第七独立守備隊六一三部隊(野砲連隊)で、満州国富錦(佳木斯<sup>ジャムス</sup>)より四十里程北方にある(街)に赤煉瓦建の兵舎、広い練兵場あり、その周囲に馬房があるというここに召集を受け、字の区長様をはじめ字民の皆様方からの「歓呼の声に送

られて、今ぞ出で立つ父母の国」と歌声を聞きながら、旗の波を後に東海道本線篠原駅を後にしたのであった。

滋賀県人の召集兵は滋賀県庁に集合した。滋賀県の召集兵の部隊までの引率は富錦六一三部隊からお迎えに来ていただいた坂本軍曹殿であった。坂本軍曹殿の指揮で広島行きの夜行列車に大津駅から乗車して朝早く広島駅に着き、広島西練兵場に向かつて行った。兵舎前に滋賀、福井、京都と一府二県の召集兵は全員現役で、百九十人位であり、点呼を終え兵舎に案内され、曹長殿の訓示、身体検査を終え、一泊して午前九時頃の汽車に乗り、午後三時過ぎには下関駅に到着して関釜連絡船の出航を待つことになった。

一府二県の現役召集兵の総指揮官は、六一三部隊よりお迎えに来ていただいた一人の曹長殿がとられるのであった。一時間三十分程待っていると釜山行きの連絡船の出航ということで釜山に上陸し、汽車で日本海側を朝鮮・満州の国境を越え満